

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 2 日現在

機関番号：12201

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24730757

研究課題名(和文) 重度・重複障害児が表出した行動の意味理解に向けた共創コミュニケーションアプローチ

研究課題名(英文) Co-creating a communication approach for children with profound and multiple learning disabilities to understand their behavior

研究代表者

岡澤 慎一 (OKAZAWA, SHIN-ICHI)

宇都宮大学・教育学部・准教授

研究者番号：20431695

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、重度・重複障害児との共創コミュニケーションに関する映像資料を収集し、共創コミュニケーションが円滑に展開する条件と重度・重複障害児の行動の意味理解に至る過程を分析することであった。その結果、10事例の教育相談場面における映像資料のべ444回分を収集するとともに、教育的係わり合いにおいては子どものイニシアチブや共同的活動に視点をおくことで子どもとのインタラクションやコミュニケーションが活発化し、係わり手との関係性が進展するとともに活動も拡大することが明らかになるなど、共創コミュニケーションの枠組みが重度・重複障害児との教育的係わり合いにおいても有効であることが示唆された。

研究成果の概要(英文)：This study, through examining video footage on the co-creation of a communication approach for children with profound and multiple learning disabilities, analyzes conditions conducive to such an activity and the meaning of their behavior. I collected 444 videos in educational guidance settings of 10 cases. As interaction and communication with the children were promoted through activities in terms of the children's initiative or through collaboration with them, and as the activities were expanded as the relationship between them and their partners strengthened, I suggest that a frame for co-creating a communication approach is useful in educating children with profound and multiple learning disabilities.

研究分野：特別支援教育

キーワード：重度・重複障害 行動の意味 共創コミュニケーション 実践研究

1. 研究開始当初の背景

多様な障害を併せ有する重度・重複障害児の行動の意味を理解することは、継続的で濃厚な医療的ケアを必要とする超重症児が増加しているという今日の状況のなか、なお喫緊の課題となっている。彼らが出す行動は、眼球や口元、眉間や指先などのわずかな動き、直接に触れていなければ見出されないような四肢の緊張、あるいは呼吸運動や発声の変化であったり(川住, 2003), あるいは、一般には不随意運動や反射といわれるような、粗大ではあるものの随意性や意図性の把握が極めて困難なものであったりする。しかし、生活体の行動は、自身の内外の様々な条件のもとに発現していると考えられ(中野, 2006; 梅津, 1978), ある行動の発現に関与している条件を分析的に見出し、その行動の意味について確定化していく作業が教育的対応の展開には欠かせないであろう。そして、行動の意味は、子どもと係わり手とのやりとり(interaction)のなかで確定されていくと考えられる(松田, 2003; 土谷, 2006)。すなわち、係わり手が子どもの行動の表出を確認し、表出が見出された場の構造と文脈に沿ってその行動の意味を解釈し、さらに、この解釈にもとづいた活動の提案をするというかたちで子どもに働きかけ、その活動の提案に対する諾否を子どもがその際に示す行動から読み取り、こうした手続きを重ね、その妥当性を高めていくなかで見出されていくものといえる。こうした取り組みは、共創コミュニケーション(co-creating communication)研究(Janssen and Rødbroe, 2007; Nafstad and Rødbroe, 1999; 土谷, 2011)として展開されており、表出された行動の意味を確定する手続きはネゴシエーションと呼ばれる(Rødbroe & Janssen, 2006; 土谷・菅井, 2000)。

共創コミュニケーションの概念については、土谷(2011)が以下のように述べている。「子どもに言語を教えるのではなく、子どもの主体性、能動性を重んじ、子どもとのコンタクト(contact)と子どものイニシアチブをもとに、相互性の高いインタラクションを子どもと共同して創りあげていく。そのプロセスにおいては子どもとイベントを共有しつつ、喜びという情動の高まりを乗り物にして、子どもの表出を活性化させる。表出の意味を共有しつつ対話の流れを創りあげ、自然言語への移行の兆しを捉えるのである」。こうした共創コミュニケーションの概念規定やその理論化、実践の推進は、欧州の盲ろう教育の専門家グループである Deafblind International のコミュニケーションネットワークによって主導されており(土谷, 2011), 特に先天盲ろうの子どもへの教育における取り組みから展開されているものである。しかしながら、共創コミュニケーション研究は、ここに留まらず、障害の種別や程度、年齢を越えて初期的なコミュニケーションの促

進・形成が課題となる子どもとの係わり合いと深く関連しているといえる。

特に、行動が極めて微弱微小な重度・重複障害児の行動の意味の理解という点についていえば、子どもに刺激を与えて反応を見たり、あるいは、ある事柄を伝えるとしてやや一方的な状況設定のなかで子どもをおいたりするといった従来取られがちであった方法論から脱却することへ導き得るものと考えられる。それは、共創コミュニケーションが次のような捉え方をするが故である。すなわち、厳しい条件を抱え、自発的な身体の動きがほとんど見出されないとされる子どもであったとしても主体として能動的に生命活動を営んでいる。係わり手は、働きかける前にまず特定状況のなかで子どもが自発する表出を確認する。また、そのうえで行われる係わり手からの何かしらの働きかけは、「反応を見る」ものではなく、子どもの行動の意味に関する解釈に基づいた「提案」であるといえる。「提案」に対して、子どもは、イニシアチブをもってその諾否を表出するのである。重度・重複障害児において、こうした表出は、目に見えるものばかりではなく、直接に身体に触れていなければ確認できないようなもの、あるいは、随意性や意図性の把握が難しい粗大な行動である場合もある。そこでは、お互いの身体に触れ合うことを許容する関係性が成立・維持されていなければならない。子どもからの自発的な表出あるいは係わり手からの「提案」に対するイニシアチブをもった諾否から相互性のあるやりとりが展開し、そのなかで子どもの行動の意味は、係わり手による省察の蓄積の結果として把握されていくと仮定される。重度・重複障害児を対象としたこのような共創コミュニケーションに関する教育実践資料(岡澤, 2010)の蓄積は近年、始まったばかりであり、多様な障害を併せ有する多くの重度・重複障害児を対象にして実証的データを蓄積することが今後の課題となっていくと考えられる。

2. 研究の目的

まず第1点目は、多様な障害を併せ有する重度・重複障害児との共創コミュニケーションの諸相を実証的に明らかにする資料を収集・蓄積することである。そして第2点目は、共創コミュニケーションが円滑に展開する条件とそのなかで重度・重複障害児の行動の意味理解に至る過程を詳細に分析することである。

3. 研究の方法

本研究は、多様な障害を併せ有する重度・重複障害児との実際的な係わり合いから得られたビデオ映像記録を一次資料とし、それをもとにしたエピソード記述(二次資料)を通して、共創コミュニケーションの諸相および対象児が表出した行動の意味理解に関す

る実証的な資料を得ようとするものである。係わり合いを記録したビデオ映像記録の分析は、欧州の盲ろう児のコミュニケーション研究で採用されている共同視聴 (Nafstad & Rodbroe, 1999) を用いる。申請者を含めたフィールドの構成員 (主に研究協力者となる教員や大学院生および保護者) とともに係わり合いを記録した映像資料を共同視聴し、以下の2点について討議・検討を行なう。1) 得られた映像資料のなかで、どの場面を本研究課題に関わるエピソードとして記述するかについて、2) 討議により採用された場面における共創コミュニケーションの諸相と行動の意味理解の過程について。エピソード記述については上述の共同視聴と討議・検討を行うことによりデータの信頼性と客観性を保障するとともに合わせて量的分析も行なう。

4. 研究成果

(1) 映像資料の収集

2012年4月から2015年3月の間に収集された映像資料は以下のとおりであった。事例1: 継続的で濃厚な医療的ケアを必要とする超重症児との共同的活動に視点をのこしたセッション80回、事例2: 食事場面におけるコミュニケーションに視点をのこした重症心身障害者とのセッション33回、事例3: 行動の切り替えが困難な肢体不自由児との交渉型コミュニケーションに関するセッション37回、事例4: 行動が著しく乱れがちな重度知的障害を併せ有する重複障害児との子どものイニシアチブに視点をのこしたセッション47回、事例5: 身体の動きが極めて制限される脊髄性筋萎縮症児との共同的活動に視点をのこしたセッション87回、事例6: 身体の動きが極めて制限される筋疾患児との学習活動に関するセッション81回、事例7: ヒラガナ文字言語信号系の学習に関する重度肢体不自由者とのセッション33回、事例8: 視覚と聴覚の障害に加え重度肢体不自由を併せ有する重度・重複障害児との共同的活動に関するセッション25回、事例9: 準超重症児事例7セッション、事例10: 脊髄性筋萎縮症児事例14セッション、合計444回分であった。

各々の事例について、現在も整理・分析が進められ、教育的係わり合いにおいては、子どものイニシアチブや共同的活動に視点をのこすことで子どもとのインタラクションやコミュニケーションが活発化し、係わり手との関係性が進展するとともに活動も拡大することが明らかになるなど、共創コミュニケーションの枠組みが重度・重複障害児との教育的係わり合いにおいても有効であることが示唆されているが、ここでは、事例5および事例4の結果の一部について報告する。

(2) 身体の動きが極めて制限される脊髄性筋萎縮症事例との共同的活動における表出行動の様相

目的

ここでは、眼球の動きと眉間の微細な動きの他に身体の動きがほとんど見出されないほどに表出が制限されている脊髄性筋萎縮症事例とのあいだで取り組まれた活動における共同性について検討するとともにこうした活動の意義について考察を加える。

方法

対象児は、10歳9カ月の女兒(以下、Vと略記する)で、特別支援学校の訪問教育の対象児である。医学的所見は脊髄性筋萎縮症(乳児重症型)、筋の動きはほぼない、とされる。出生時からの著明な筋力低下のため0歳時に気管切開している。常時人工呼吸器を使用し、経管栄養であるなど、継続的で濃厚な医療的ケアを必要とする。感覚について、見えて聞こえていることは確認されるが詳細な評価はできていない。斜視があり、係わり手がVの視線の方向を確定することは容易ではない。眼や眉間の動きが見出されるがその他指先を含めて四肢の動きは極めて見出し難い。係わり合い開始当初(2012年4月)の行動の様子: 周囲からの問いかけに対応するかたちで両眼眼球が上転する。しかし、同じ質問に対して肯定でも否定でも上転することが少ない。筆者ら(以下、A)との係わり合いは、2012年4月から基本的に週1回、1時間30分程度、午前時間帯に行なわれた。係わり合いが開始されて18回目より、Aの手の甲の上にVの掌を重ね(ハンド・アンダー・ハンド)、共同的にキーボードなどに触れて一緒に音を出したりする活動を展開した。Vの手の動きを読みとることはまったくできない。この活動の経過のなかでVは、曲の切れ目やAの演奏ミス時に眼球を動かしたり、複数のAのなかから一緒に演奏する者を選択する際、選択しない者に対して意図的に眼球の動きを抑制したりする様子が見られるようになってきた(岡澤, 2013)。ここでは、こうした共同的活動(土谷, 2006)に取り組んだ連続する15セッション(以下、各々S1~15と略記する)を分析対象として、平常時と共同的活動時におけるVの表出行動の様相について検討する。

結果と考察

平常時と共同的活動であるハンド・アンダー・ハンドの活動時に見られるVの表出行動のセッションごとの総計をFig.1に示した。単位時間は10分間とした。ここでの表出行動とは、眼球の上転、黒目をクルッと回転させる動き、視線を上に向けて白目がちになる、右眉頭上部の動きの4つであった。これをみると、S1を除くすべてのセッションにおいて、平常時と比して共同的活動時に表

出行動がより多く発現していることがわかる。また、こうした表出行動の発現の有無を同じく平常時と共同的活動時とに分けて検討した (Table1)。表出行動は、上述のをさらに「まぶたが痙攣するようにピクピクする動きを伴うもの」と「まぶたが痙攣するようにピクピクする動きを伴わないもの」との2つに分け、これらを含めた5つに分類された。Table1をみると、共同的活動時は、平常時と比較すると、Vがより多様なレパトリーの行動によって表出をしていることがわかる。また、普段は不安定である眼球運動が、共同的活動においては操作対象を注視している様子が見出され、VがAと活動を共有し集中していることが推察される。さらに、演奏の開始を要望して涙ぐんだり、演奏ミスに関する問いかけに対して眼球運動を見せないなど情動表出も促進されつつある (岡澤, 2013)。以上より、こうした活動は、VとAとの共同的な営みであるということができよう。こうした共同的活動が成立するには、Vの微細な表出をAがつぶさに確認し、Vの注意が向いている対象にAも注意を重ねることが条件として重要であった。

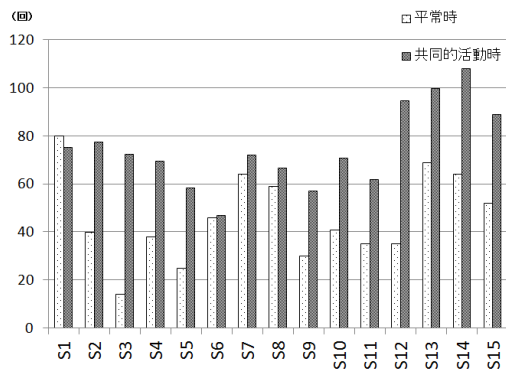


Fig.1 平常時と共同的活動時における表出行動の総計

Table1 平常時と共同的活動時における表出行動の有無

	S1	S2	S3	S4	S5	S6	S7	S8	S9	S10	S11	S12	S13	S14	S15
平常時	上転														
	黒目をクルッと回転させる														
	白目がち (ピクピクあり)														
	白目がち (ピクピクなし)														
	右眉頭上部の動き														
共同的活動時	上転														
	黒目をクルッと回転させる														
	白目がち (ピクピクあり)														
	白目がち (ピクピクなし)														
	右眉頭上部の動き														

は表出行動があったこと、 はなかったことを示す

(3) 行動が乱れがちな重複障害事例における共同的活動の拡大と行動調整の促進
子どものイニシアチブに視点をのこした係わり合いからの考察

目的

障害の重い子どもの行動の乱れ (国立特殊教育総合研究所重複障害教育研究部, 1996) に対して、従来、それらを特定の障害に特有な行動とみたり、「問題行動」として変容を期待し、直接的・技法的な対処を求められたりすることが多く (土谷, 1994)、こうした傾向は現在においても大きくは変わらないように思われる。しかしながら、こうした対応においては行動の意味を係わり合いの文脈のなかからとらえる観点が希薄であるように思われ、実践の蓄積は少なく限られている。ここでは、行動の乱れが著しかった重複障害事例と共同的活動を重ねるなかで行動調整が促進された経過について、生命活動の調整度 (梅津, 1976) と子どものイニシアチブ (土谷, 2012) の観点を踏まえ、経過に関わった条件を検討することを目的とする。

方法

対象児は、筆者ら (以下、A と略記) との係わり合い開始当初 (2011 年 1 月) 11 歳 9 ヶ月で知的障害特別支援学校小学部重複障害学級に通学する 6 年生の男児 (以下、Y と略記) であった。2015 年 3 月の現在まで筆者が大学において実施している教育相談の場で月に 1~2 回、90~120 分程度の係わり合いを重ねている。2 回目以降の教育相談の様子が映像資料に残されている。当初の教育相談の主訴は、「おたけび」と「自傷」への対応であった。「おたけび」は、掌を耳元に当てながら、喉の奥から絞り出すような「あー」という声を発するもので小学校中学年頃からひどくなった。「自傷」は、掌で自身の頬を激しく打つ (以下、頬叩きと略記) もが多く、その他には、こぶしで鼻骨を打つ、指を自身の眼に入れる、頭を床に打つ、などがある。その後、それらが軽減する様子は見られなかったとのこと。学校では、設定された活動に取り組みせることなどを契機として、「おたけび」、「自傷」がひどくなり、下唇の左右を繰り返し噛んで出血する様子が見られた。筆者との係わり合い開始当初の行動の様子は以下の様であった。手を支えられて歩行が可能であるが、不安定でまもなく座り込むことが顕著。A が抱っこをしてプレイルームに向かうが、その間、「おたけび」を繰り返し発する。また、掌で自身の頬を激しく打つ。母親が与えているタオルは唾液ですぐにくっしりする。音声言語による発信はない。その他、人に対する構成的な発信も少なく、回避的行動が優位。周囲の人やモノに対して、一瞥的に視線が向いたり、ときにさらに接近して触れたりすることがあるものの、その後の交渉は長く続かない。こうし

た様子を受けてYとの係わり合いの方針を以下の様に仮設した。「おたけび」や「自傷」を生命活動の調整上の働きを有するものととらえ、係わり合いの文脈のなかでその意味を見出すよう努め、直接的な対処の対象とはしない。Yの興味・関心あるいは注意の方向性および焦点をとらえる、Yの自発した行動が十分な展開を経て終止に至るよう働きかける。やりとりの活発化を見計らい、Aからの活動の提案も打診的に重ねる。

結果と考察

経過1:「おたけび」や「自傷」、泣きが頻発する。移動場面においては、Aにもたれ掛かってなし崩し的に抱っこのかたちになることがほとんど。一方、プレイルームにおいて発声と泣き、自傷を繰り返しつつ一瞥的に玩具などに接近するYに対してAは、状況説明の叙述を重ねつつ追従する。Aを一瞥するときには柔らかく微笑み返し、時折接近したりAに求めたりする手叩きやキーボードの音出し、トランポリンの跳躍には積極的に応じ、やりとりの契機とした。少しずつAの接近に対する回避様の行動が少なくなる(2011年2月)。経過2:次第にAへの接近が活発化し、「おたけび」(発声)、「自傷」が少なくなる(2012年4月)(Fig.1)。また、喜びの情動に伴う身体表出が活発化したり、活動内容の拡がりも見られる(2012年8月)。一方で、Aからの音声言語による声掛けに対応して行動を変換する様子もよく見られるようになる。経過3:「おたけび」「自傷」は格段に減少し、激しい泣きはほとんど見られない。自発的な発信が増加し、Aからの信号が入りやすくなった(2015年3月現在まで)。以上の経過は、筆者らの方針の妥当性を補強するものといえる。

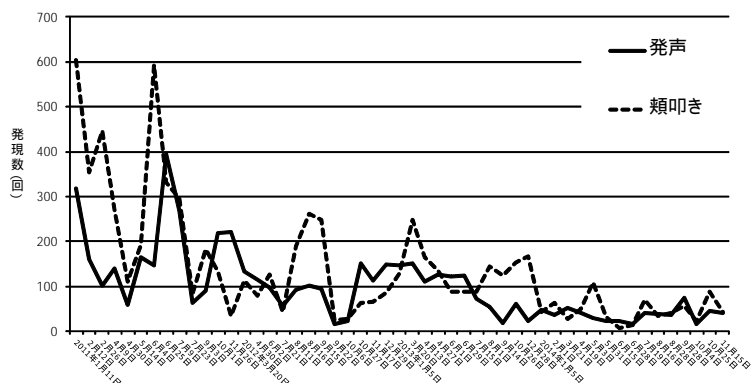


Fig.1 発声と類叩きの発現数

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

- 1) 野田有子・岡澤慎一 (2014) 行動の乱れが著しい重度知的障害児における活動の拡大過程—子どものイニシアチブに視点を

- において—。宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要, 37, 215-222。(査読無)
- 2) 齊藤美代子・岡澤慎一 (2014) 重度・重複障害児との共同活動とコミュニケーションに視点をのいた教育的係わり合いに関する検討。宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要, 37, 207-214。(査読無)
 - 3) 岡澤慎一 (2012) 超重症児への教育的対応に関する研究動向。特殊教育学研究, 50(2), 205-214。(査読有)

[学会発表](計14件)

- 1) 岡澤慎一 (2014) 身体の動きが極めて制限される脊髄性筋萎縮症事例との共同的活動における表出行動の様相。日本特殊教育学会第52回大会発表論文集。(電子データ)
- 2) 岡澤慎一・中村保和・土谷良巳・菅井裕行・笹原未来 (2014) 先天盲ろう児との共創コミュニケーションの様相—(2)Triadic interactions に関する実践を巡って—。日本特殊教育学会第52回大会発表論文集。(電子データ)
- 3) 安藤隆男・岡澤慎一・大久保賢一・木船憲幸 (2014) インクルーシブ教育システム下における特別支援学校の役割—教員養成および現職研修の立場から特別支援学校に求められる専門性をどのように支えるか—。日本特殊教育学会第52回大会発表論文集。(電子データ)
- 4) 菅井裕行・岡麻衣子・土谷良巳・岡澤慎一・笹原未来・川住隆一 (2014) 重度・重複障害者への教育的支援。日本発達障害学会第49回研究大会発表論文集, 5。
- 5) 土谷良巳・中村保和・菅井裕行・岡澤慎一・笹原未来 (2014) 障害の重い子どもが取り組む学習とは(続)—その多面性について—。日本教育心理学会第56回総会発表論文集, 152-153。
- 6) 岡澤慎一・寺本淳志 (2013) 身体の動きが極めて制限される脊髄性筋萎縮症事例の共同的活動における意図的表出の促進に関する実践研究。日本重症心身障害学会誌, 38(2), 363。
- 7) 岡澤慎一・寺本淳志 (2013) 身体の動きが極めて制限される先天性筋疾患事例の意図的表出と対応する信号系活動の促進に関する実践研究。日本特殊教育学会第51回大会発表論文集。(電子データ)
- 8) 中村保和・岡澤慎一・笹原未来・土谷良巳・菅井裕行 (2013) 先天性盲ろう児との共創コミュニケーションの様相—(1) Dyadic interactions に関する実践を巡って—。日本特殊教育学会第51回大会発表論文集。(電子データ)
- 9) 土谷良巳・菅井裕行・岡澤慎一・中村保和・笹原未来 (2013) 障害の重い子どもが取り組む学習とは—その現代的課題と展望—。日本教育心理学会第55回総会発表論文集, 96-97。

- 10) 岡澤慎一(2012)重度肢体不自由事例におけるヒラガナ文字言語信号系活動の形成・促進に関する学習経過. 日本教育心理学会第54回総会発表論文集, 224.
- 11) 菅井裕行・笹原未来・岡澤慎一・中村保和・土谷良巳(2012)重度・重複障害教育における共創コミュニケーションの課題と展望. 日本教育心理学会第54回総会発表論文集, 912-913.
- 12) 岡澤慎一(2012)身体の動きが極めて微弱な超重症児に見出された行動の意味に関する係わり手の把握過程. 日本特殊教育学会第50回大会発表論文集(電子データ)
- 13) 岡澤慎一・中村保和・菅井裕行・川住隆一・土谷良巳・松田直(2012)重複障害教育から創出された教育実践の視点の共有と今後の教育のあり方. 日本特殊教育学会第50回大会発表論文集.(電子データ)
- 14) 土谷良巳・岡澤慎一・中村保和・菅井裕行・笹原未来(2012)先天性盲ろう児との共創コミュニケーションへのアプローチ～「対話」としてのコミュニケーションに関する実践を巡って～. 日本特殊教育学会第50回大会発表論文集.(電子データ)

(3) 連携研究者
なし

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕
出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岡澤 慎一 (OKAZAWA SHIN-ICHI)
宇都宮大学・教育学部・准教授
研究者番号：20431695

(2) 研究分担者

なし